

研究・調査報告書

分類番号	報告書番号	担当
C-141	12-321	慶應義塾大学
題名（原題／訳）		
<p>Changes in drinking behavior among control group participants in early intervention studies targeting unhealthy alcohol use recruited in general hospitals and general practices.</p> <p>総合病院と一般開業医クリニックで登録される不健康飲酒者が対象の早期介入研究における対照群参加者の飲酒行動の変化。</p>		
執筆者		
Bischof G, Freyer-Adam J, Meyer C, John U, Rumpf HJ.		
掲載誌		
Drug Alcohol Depend.2012 Sep 1;125(1-2):81-8. doi:		
キーワード		
不健康飲酒、介入試験、一般開業医、入院患者		
要 旨		
<p>目的：</p> <p>本研究は、一般開業医と2つの総合病院（GH）の内科および外科病棟で率先して補充される不健康飲酒患者における対照群で、測定する変数の影響を分析することを目的とする。</p> <p>方法：</p> <p>不健康飲酒者を目標としている RCT の2つの対照群を分析し比較した：一般開業医の外来患者（GP;n=99）と入院患者（GH;n=173）。両群は18～64歳のすべての患者を系統的にスクリーニングし研究に参加した。英国医学会（20/30gのalcohol/日；女性/男性）のリスク基準より多く飲んでいる患者、および／またはDSM-IVによるアルコール乱用または依存の基準を果たした患者を対象とした。両群の患者は研究に登録された後、アルコールに特定しない健康的な生活に関するパンフレットを受けとり、12ヵ月後に再評価された。</p> <p>結果：</p> <p>GH群の患者はGP群患者より、有意に高齢であり、より男性が多く、より少ない学校教育を受けており、介入開始時に変化しようとする準備状態にあった。両群は、アルコール関連の診断または喫煙状態に関して相違はなかった。12ヵ月追跡調査で、GH群ではGP群に比べて、断酒または定めた基準より少ない節酒をした患者が有意に多かった（50.0%対26.1%（$p < .001$））。多変量解析で群間のベースラインの差を補正した後にも、医療の受ける状況（GH対GP）は、非問題飲酒または断酒をするための有意の予測因子であった。</p> <p>結論：</p> <p>得られた所見から、GPの外来患者より非アルコール関連のため入院した患者の方が特別な介入をせずとも問題飲酒からの変化が頼得られやすい状況にあることが示唆された。入院患者への短い介入に対する意味について考察を加えた。</p>		